

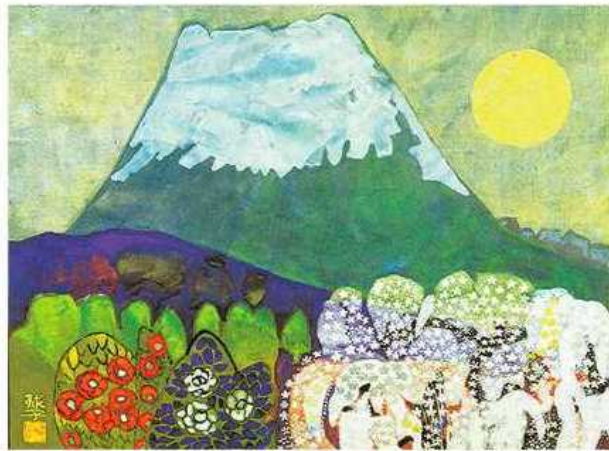
美術評

フィンランド陶芸 芸術家たちのユートピア

古川美術館では毎年新春の企画展を開いているが、今年も日本画や工芸品を中心に盛りだくさんの館蔵品を展示している。「富士と桜」「歴史」「祝い」「自然美」といった小テーマごとにまとめたことにより、作品の魅力を理解しやすく、鑑賞への導入となっている。

片岡球子「桜咲く富士」(制作年不詳)は、もちろん「富士と桜」テーマの作品のひとつである。手前には桜をはじめとした花がきらめくように咲き、その向こうに大きな富士山が顔を出す。繊細な花々とは対照的に、どっぴりと誇張された姿の富士山は、

片岡球子「桜咲く富士」(古川美術館蔵)



日本の「こころ」つながる美

武骨な中にどこかユーモアのある巨人のようだ。片岡球子は、愛知県立芸術大の教授も務めた日本画家で、二〇〇八年に百三歳の長寿を全うした。富士山は彼女が終生描き続けた主題である。

この美術館では、現代の日本画家の作品も意欲的に収集している。加藤正音も愛知県に住んだ画家であり、その大作「尾張春風伝 徳川宗春」と「同 璃津」のペアは今回が初公開となる。同じく愛知ゆかりの小説家、清水義範の長編「尾張春風伝」から着想

された見応えのある作品で、「歴史」の小テーマのもとに展示されている。これらの小テーマは、からみあって「日本のこころ」という本展の大テーマに融合していく。「つながる美」という副題は、さまざまな形をとって現れる美はすべて深いところまでつながっているということでもあり、日本の美がこれまで時代の変転を超えてつながってきたし、また平成の次の時代につながっていくという主張でもあるのだろう。この美術館が大切にしている美意識と世界観が、よく感じられる展覧会である。

(浅野和生＝愛知教育大教授)

作品群を貫く美意識